
世界の守護者

black1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の守護者

【Nコード】

N5410S

【作者名】

black1

【あらすじ】

人間界で唯一人々が暮らすアレイズ大陸のとある集落で過去を忘れ、のんびりと暮らす主人公、レオン。だが、ある日集落の長老から頼まれた仕事のせいでレオンは戦いの渦に巻き込まれていく・・・。

8 / 26 2章の内容と1章から6章までのタイトルを変更しました。

はじめに

この作品を読むにあたっていくつか注意があります。

まず1つ目は、作者は気まぐれな人物なので更新が超不定期ですのでご了承ください。

2つ目は、誤字、脱字が多いので指摘してくださるとありがたいです。

3つ目は、この作品は初めての作品なので途中で話の内容がおかしくなることもあるかもしれませんがそこはスルーしていただいて結構です。

最後に、できるだけ感想などをいただけると嬉しいです。

それでは作品をお楽しみください。

1章 依頼受諾（前書き）

初めての作品なので変なところもあるかと思いますがよろしくお願いします
>
<

1章 依頼受諾

そこは人間界の中で唯一人がすんでいる大陸、“アレイズ大陸”の北部に位置する魔法都市エンディミオン郊外にある“聖地”と呼ばれる森の集落。

その“聖地”でレオンは長老に呼び出され走っていた。

長老の家に着くと、長老と友人のクラウドが待っていた。

「すみません、遅れました。それでなぜ俺達は呼び出されたんですか？」

とクラウドが聞くと、長老は

「これを見てみなさい。」

と言って手に持っていた槍を渡した。

「何このボロイ槍？」

「長老これはなんですか？」

レオンとクラウドそれぞれがこう言うと、

「それは昔、“神の化身”が使ったとされる伝説の武具の1つで“グングニル”という。この槍は投げた者と槍の間で動くもの全てにさまざまな攻撃魔法を降らせるとい武器だ。それで君達を呼び出した理由だが、戦闘の技術の高いお主にこういった絶大な破壊力

を持った伝説の武器が戦争で使われる前に集めて欲しいからじゃ。やってくれるか？」

「もちろん！それで、伝説の武具はどこにあるんだ？？」

「それは様々な伝承などを調べれば分かるだろう。」

「分かりました、やりましょう！」

「では気をつけての。」

そしてレオンたちの旅は始まった。

1章 依頼受諾（後書き）

読んでくださりありがとうございます！
誤字、脱字などがあつたら教えてください。
それと感想をもらえると嬉しいです。

2章 搜索開始

聖地を後にしたレオンたちは“伝説の武具”の情報を集めるため、エンディミオン魔法都市へと向かった。

レオンたちは歩きながら雑談を始めた。

「なあクラウド。俺あんまり聖地を出たことないんだけど、いきなり魔法都市なんて行つていいのかよ？」

「問題ないよ。俺は結構聖地を抜け出していったことがあるし、長老からお金ももらったしな。」

「そうか。・・・そういやクラウドってなんでこんなめんどくさい依頼なんて受けたんだ？」

「俺は面白そうだったからだ。それで、レオンは？」

「俺は記憶を取り戻すためだ。」

「記憶を取り戻す？」

「ああ、あの後長老に“伝説の武具”の中には記憶に干渉するものもある。っていったからな。もしかしたら10歳までの記憶を取り戻せるかも知れない。」

「・・・そうか。まあ頑張ろう！」

「もちろん！」

そうしてる内にレオン達はエンディミオン魔法都市に到着する。

「想像してたのより凄いな。」

「突っ立ってないで行くぞ。」

「行くてどこに？」

「エンディミオン魔法図書館だよ。あそこにはエンディミオン中の書物が集められてるらしいからな。」

エンディミオン魔法図書館に着くと早速レオン達は古文書を調べ、3つの“伝説の武具”の場所を見つけることに成功した。

「クラウド、最初はどこに行く？」

「じゃあここから一番近いストラセル湖に行こう。」

「^{レーヴァテイン}魔剣”か。一体どんなのだろう。」

そしてレオン達はすぐにストラセル湖へ向かった。

2章 搜索開始（後書き）

読んでくださりありがとうございます！
誤字、脱字などがあつたら教えてください。
それと感想をもらえると嬉しいです。

3章 湖の番人（前書き）

やっとう話目です！

ここから徐々に長くなるかも知れませんがよろしく願います
<

3章 湖の番人

「意外ときれいな湖みずうみだな。」

レオン達は伝説の武具を探すために魔法都市エンディミオンを西に10kmほど行ったところにあるストラセル湖に来ていた。

「あんまり気を抜くな。本当かどうかは知らないけどここには水龍がいるみたいだし。」

「わかってる。じゃあとりあえず湖の中を探るか？」

「そうするしかなさそうだな。」

そう言うクラウドは持ってきた荷物の中から金属製の短剣ダガーを抜き、同じく金属製の長さが250cmもある大きな剣グレートソードを背負う。

「クラウド、お前もしかしてそんなもん背負って湖に飛び込む気か？」

「もちろん、まあでも水中で魔法使うから大丈夫。」

「そついう問題か？」

そしてクラウドは湖に飛び込もうとしたが、“なにか”の頭がクラウドを喰らおうとして水の中から出てきた。

クラウドはそれを左に跳躍してかわし、グレートソードを構える。

「レオン、雷系の魔法で援護してくれ。」

「わかった。」

そう言うとレオンは空中に魔方陣をかき呪文を唱える。

「我・雷神の力を借り、稲妻を放つ。ウェークサンダー、発動！」

呪文を唱えると魔方陣から雷が直線上に放たれ、水龍にあたりそうになるが半透明な赤い壁のようなものが現れ、雷の魔法をかき消す。

「くそ、こいつ^{アンチマジックフィールド}対魔法障壁持ちかよ。」

「レオン、このままだとこっちが不利だ。しばらくこいつを引き受けてくれるか？俺はその間に^{レーヴァテイン}魔剣を見つけてくる。」

「わかった。頼んだぜ。」

そしてレオンは長さが90cmほどの太刀を取り出して構え、水龍と相対し、クラウドイは水の中へと飛び込む。

3章 湖の番人（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

次回も頑張つて早く書けるようにします!!

4章 始まる覚醒（前書き）

やっと書けました><

今回は若干長めです。

4章 始まる覚醒

「とりあえずこいつが湖に潜らないようにしないと。」

そう言うのとレオンは太刀で水龍の顔を斬りつけるが硬い鱗に弾かれ、一旦距離をとる。

距離を詰めるように水龍は陸に上がる。すると今までは見えなかった全身が見える。

首と尻尾は長く、4本の足はヒレではなく水かきがついて口には鋭い牙が煌いている。

レオンが水龍を観察していると水龍は大きく息を吸い込み、体内で高圧力をかけた水を放つ。

「水!？」

水龍の放った水をレオンはとっさによける。見ると、放たれた水は湖の周りにある木々を難なくなぎ倒している。

「すごい威力だ。当たらないようにしないと。」

そう言うのとレオンは水龍の左側に回り込むが、水龍は左腕を振り払いレオンを襲う。

「しまっ」

水龍の攻撃を避けきれず、構えていた太刀もろともレオンは吹き飛ばされ木に叩きつけられる。そしてその衝撃でレオンの意識は遠のいていく。しかしその時レオンの中で何かが“目覚めた”。

倒れたレオンはなぜか髪と目の色が黒から赤に変わる。

そしてすぐに立ち上がると太刀を持って水龍に向かって走り、斬りつける。

今度は弾かれずに鱗もろとも水龍を切り裂く。

だが太刀にはひびがはいり、もう一度斬ろうとしたところで粉々になっってしまう。

「ちっ、脆いな。しょうがない、“アレ”を出すか。」

そしてレオン（？）はそう呟くと右手を空に掲げる。

「我・封印を解き召還する。来たれ、魔剣レーヴァテイン、神盾アイギス！」

すると湖から炎を纏った剣が、南の方から輝く盾がそれぞれレオン（？）の方に飛んでくる。

レーヴァテイン
アイギス
魔剣を右手で、神盾を左手で取り水龍に向かって疾走する。

水龍はそのレオン（？）にまたも高圧力をかけた水を放つがレオン
アイギス
は神盾で防ぐ。

そのまま勢いを殺さずにレオン（？）は水龍の額に魔剣を突き刺す。
レーヴァテイン
しかしその後急にレオン（？）の髪と目の色が元の黒に戻る。

元に戻ったレオンは剣を水龍の額に突き刺している自分に驚いた。

（気を失ってからいったい何が起こったんだ？）

そう思っている時にクラウドが陸に上がってきた。

4章 始まる覚醒（後書き）

感想・間違いなどがありましたらぜひ教えてください！><

5章 能力発動

「レオン、その剣つてもしかして・・・。」

クラウドは湖から上がると来たときには持つてなかった剣について何かを言いかける。

「わからない。けどもしかしたら魔剣レーヴァテインかも知れない。」

「そうか。じゃあエンディミオンで詳しく調べるか。」

そう言つてクラウドは来た道を戻ろうとする。

「あ、ちょっと待ってくれ。行く前にこの水龍を“喰いたい”んだけど。」

レオンがそう言つとクラウドは戻ってきて湖の近くにある森の木にもたれかかった。

「早めにやってくれよ。」

許可がでたのでレオンは水龍に近づき、右手で水龍の体に触れる。

「『ドレイン神喰手』発動！」
『ドレイン神喰手』、それは相手の全てを奪うことのできる能力。

発動条件は相手に直接触れていることと、相手が生きていないこと。

それと、相手を喰らう代償に、使用すると喰らった相手が強ければ強いほど、激しい痛みが全身にはしり、自分の力を超えたものを喰

らおうとすると、死に至ることもある。

すると、レオンの右手に穴ができ、水龍の体が粒子に分解されて穴に吸い込まれる。

水龍の体を全部吸い込むを穴は勝手に閉じ、レオンはうずくまる。

（くそつ。いつものことだが、この痛みには慣れないな・・・。）

全身に激しい痛みがはしるが、レオンはそれに必死で耐える。

「毎回大変そうだな。」

「・・・もう大丈夫だ。行こう。」

しばらくすると痛みは消え、レオンとクラウドはエンディミオンに向かう。

そして、10kmの道のりを再び歩き、レオン達は無事にエンディミオンに辿り着くと、宿に泊まり体を休めた。

だがそのころ魔法都市エンディミオンを南に50kmほど言った所にあるアリア帝国や、世界にたくさんの団員を持つとある騎士団でも秘密裏に伝説の武具集めを始めていた・・・。

6章 別行動(1)(前書き)

1ヶ月ぶりの投稿です><

6章 別行動(1)

宿で休んだレオン達は手に入れた魔剣と神盾レーヴァアティザイギスが本物なのかを確かめるため、予定通り再びエンディミオン魔法図書館に向かっていた。

しかし、レオンがその途中で何かを思い出したかのように口を開く。

「なあクラウドディ。この魔剣と神盾をどこかに隠さないか？こんなもん身に着けてたら盗賊とかに狙われるぜ。」

「そうだな。騒さわぎになると不味いし“迷いの森”にでも隠すか？」

“迷いの森”とは魔法都市エンディミオンの東にある森である。その地形は複雑で、その上手ごわい魔物が住んでいて入って出てきたものがほとんどいないことからそう呼ばれている。

「じゃあちよつと“ゲート”使って行ってくるからその間に魔剣と神盾レーヴァアティンアイギスのことを調べておいてくれ。」

「わかった。」

そしてクラウドディはエンディミオン魔法図書館に向かっていった。

「さてと、俺も行くか。」

レオンはそう言うと宙に魔方陣をかき、呪文を唱える。

「我・魔力によって空間の法則を変え発動する。開け、ワールドゲート。」

するとレオンの前に3メートルほどの黒い門が現れる。

その門を開け、中に入ると眼前には森が広がっていた。

そう、ワールドゲートとは一種の転移魔法なのだ。

ただし、行きたい場所の座標がわかっていないとうまく門がその場所に繋がらない。

また魔力の消費が多く、普通の魔法使いや魔術師には扱えないものである。

「しかし、見るからに不気味な森だな。」

まよいの森からはおぞましい叫び声が聞こえてきて、レオンは足を止める。

「あ、そういえば太刀を買い換えるの忘れてた！武器がないと魔物達の相手はきつそうだな。」

だがそんな言葉とは裏腹にレオンは森に入っていく。

「まあいいか……。きついけどヤバイってほどじゃないだろうし。頑張ってみるか。」

そしてレオンはどんどん奥へ進んでいく。

6章 別行動(1)(後書き)

感想などをできればお願いします^^

7章 別行動(2)(前書き)

毎回投稿遅くてすみません><

7章 別行動(2)

森に入ったレオンは気配を消し、魔物に見つかからないように気をつけながら進んでいった。

そしてしばらくしたところでレオンは洞窟を見つけ、たいまつを持ち、中に入る。

少し歩くとすぐ行き止まりになったいたのでそこで立ち止まる。

「よし。ここら辺でいいかな。元々この森に入る人なんて全然ないし。」

そう言うのとレオンはたいまつを置いて護符を取り出し、レーヴァティディギス魔剣と神盾に貼り付ける。

「封印の護符よ。封じられし力を解放し、対象を封じよ。」

すると、レーヴァティディギス魔剣と神盾が黒く染まっていく。

それを確認した後レオンは持ってきた荷物の中から白い箱を出し、レーヴァティディギス魔剣と神盾を入れ、蓋を閉める。

箱の蓋を閉めるとレオンは呪文を唱える。

「開けるものに災厄を与えよ。パンドラ、起動。」

レオンが呪文を唱えると白い箱にはいくつもの魔方陣が同時に展開されていく。

「よし、後はここから出るだけだ。」

そう言って洞窟から出るとレオンは一匹の小柄な龍に出会ってしま
う。

「なんでこんなところに龍が!？」

レオンは見つけられたとわかった瞬間に魔方阵を展開しようとした
が、相手がすごい勢いで突進してきたので慌ててかわす。

かわした直後にレオンは魔方阵を展開し終え、目を閉じる。

「我・光神の力を借り、全てを覆い尽くす光を放つ。フラッシュ、
発動!」

すると魔方阵から閃光が放たれ、レオンのほうを向いていた龍は目
が眩んでしまう。

「今のうちに逃げないと。」

そしてレオンは全力で走り、森の出口を目指した。

同時刻にクラウドは魔剣と神盾のことが書いてある古文書を見つ
け、手に入れた2つの“伝説の武具”が本物であることがわかった
のだが……。

「おかしい……。確かにあの神盾は本物だ。アイギスでも、なぜアリア帝
国の南にある洞窟に封印されていると記述されているものがあんな
ところに……?」

そしてクラウディはしばらく考え込む。

「まあとりあえず、レオンが戻ったら魔剣と神盾が本物ってことだけ伝えておくか。」

そしてクラウディは今度は“伝説の武具”とは関係のないものを調べ始めた・・・。

8章 もう1つの“力”

レオンは出口へ向かって全力で走る。

だが後もう少して森から抜けれるというところで1つ目の巨人、サイクロプスと遭遇してしまう。

「おいおい、冗談だろ？この森にはこんなものいるのかよ!？」

レオンがそんなことを言っている間にもサイクロプスは右手に持っている木の棍棒を振り下ろしてくる。

「おっと。」

レオンは攻撃に巻き込まれそうになりながらも何とか棍棒を避け、魔方陣をえがく。

「我・火神の力を借り、燃え上がる炎を放つ。ウォームファイヤー、発動!」

すると、半径10cmくらいの火球が魔方陣から発生し、一直線にサイクロプスに飛んでいく。

しかし、サイクロプスは火球に当たっても気にせず突っ込んでくる。

油断していたレオンはその体当たりに直撃して吹き飛び、近くにあった木に叩きつけられてしまう。

（くそつ。こうなったら“アレ”を使うしかないか・・・。）

「『フォームリリース 姿解放・火龍』発動!」

『リリース解放』は『ドレイン神喰手』で喰らった“力”を解放し、自分のものとして使う能力である。

また、『リリース解放』には、

喰らった者の姿を解放する、第一段階『フォルムリリース姿解放』

喰らった者の魔力を解放する、第二段階『マジックリリース魔力解放』

喰らった者の能力を解放する、第三段階『アビリティリリース能力解放』

喰らった者の“力”を全て解放する、最終段階『オールリリース全解放』

の5つの段階があり、後の段階になるほど体力の消耗が激しく、使用できる時間が限られてくる。

『フォルムリリース姿解放』を使ったレオンはその体を火龍のものへと変えていく。

そしてレオンは大きな翼、強靱な4本の脚、長い尻尾、燃える火のような赤い鱗を持った龍へと姿を変えた。

9章 圧倒的な“力”

龍となったレオンの無形の力の波動に木々がざわめく。

「ゴワアアアアオオオオオツ！」

火龍とレオンはサイクロプスに向かって咆哮する。

その瞬間木々のざわめきが、猛獣・怪物たちの鳴き声が止み、森は一気に静まり返る。

そしてその強靱な4つの足を使いサイクロプスへと突進する。

サイクロプスは棍棒を突進してくるレオンに向かって振り下ろすが、龍の鱗の前では歯が立たずへし折れ、サイクロプスはレオンの突進に直撃し倒れる。

武器を失ったサイクロプスはすぐさま立ち上がると追撃を加えようとしているレオンから5mほど距離をとり、近くにあった大木を無理やり引き抜き、構える。

しかし、火龍となったレオンの危険を察知したのか警戒して近づいてこない。

（近づいてこなくなったか……。この状態のそんなに長く継続させれないし、そろそろ逃げるか。）

「ゴワアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオ！」

レオンはもう一度サイクロプスに向かって咆哮をし、大きく息を吸う。

そして、サイクロプスに向かって火球を放つ。

サイクロプスは大木で防ごうとするが火球は着弾するとともに轟音を発し、大木ごとサイクロプスの右腕を焼き払った。

ブレスの硬直が解けた直後レオンはその大きな翼で飛び上がり、一気に森の外へと向かう。

右腕を焼かれたサイクロプスはその姿をただ呆然と見ることしか出来なかった。

森の外へ出た後はすぐに着陸し、『フォルムリリース 姿解放』の発動を解除する。

だがその瞬間『リリース 開放』を使った反動で、強い脱力感と疲労感が体を蝕み、レオンは思わずその場に座り込むと体力の回復に努める。

10章 騒動

しばらく休み、体力、魔力を回復させるとレオンはエンディミオンに戻るために“門”^{ゲート}を開く。

「我・魔力によって空間の法則を変え発動する。開け、ワールドゲート。」

3メートルほどの黒い門が現れ、それを開き中に入るとそこはクラウディとの合流場所である人気^{ひとけ}のないエンディミオン魔法都市の郊外だった。

「意外と遅かったな。」

背後から声がかかり、振り返る。

「新しい太刀を買うの忘れててちよつとてこずったんだよ。しかもフォルムリリース『姿開放』も使ったしな。」

「『フォルムリリース』を使わなきゃいけないくらいの相手が“迷いの森”に？」

「ああ。小型の龍とサイクロプスが居た。龍のほうはフラッシュで撒いたんだがサイクロプスがなかなか手ごわくて……。それよりそっちはなんか成果があったのか？」

「もちろん。とりあえずあの2つは本物に間違いないことが分かった。それと街でちよつと聞いたんだが南のARIA帝国が戦争の準備をしているらしい。どこを狙うのかは分からないけど一応警戒して

おいたほうがいいと思う。」

「やっぱりあの2つは本物か……。ところでその話長老に伝えなくていいのか？ 聖地はエンディミオンの平和維持とそのための人材の育成を行ってるんだろ？ だったらアリア帝国がここに攻めてきたことを考えて準備をしておかないと。」

「その心配はないと思う。聖地にはかなり優秀な人材がそろってるし、この話もう知ってるだろう。」

「そうか。ならいいけど。」

そういつてレオンたちは魔法都市にある宿へと歩き出す。

しばらくすると何者かが自分たちを追っていることに気づく。そこでレオンは宙に魔方陣をえがく。

「我・周囲を見通す瞳を欲す。サーチアイ、発動！」

魔方陣から眼が出現し、レオンの意識と魔方陣から出現した眼がリンクする。

そして半径500m以内のものを見通す。

「まずいな……。クラウディ、囲まれたみたいだ。」

「みたいだな。徐々に気配が近づいてくる。」

その直後、四方から鎧の胸のあたりに杖と剣が交差したようなマー

クがある黒い鎧を着た者たちが出てきて、レオンたちに剣を向ける。

11章 包囲、そして逃走

レオンたちを包囲した黒い鎧の騎士たちの中から1人、唯一馬に乗っているリーダー格と思われる人物が出てくる。

「レオンとクラウドだな？ 持っている武器を地面に置き、大人しく捕まるんだ。そうすればこちらは手荒な真似はしない。」

もちろんレオンたちは捕まるつもりはないので武器を置きながら、小声で作戦を練る。

（レオン、どうする？）

（どうするって逃げるに決まってるだろ。俺がフラッシュを使うからその隙に一気に逃げるぞ。）

（分かった。）

武器を置き終わると、数名が武器をしまい近づいてくる。

だが、その瞬間レオンは素早く魔方陣をかき、呪文を唱える。

「我・光神の力を借り、全てを覆い尽くす光を放つ。フラッシュ、発動！」

レオンの魔法に気づいた騎士たちが一斉に襲い掛かろうとするが、そのころにはもうすでに遅かった。

あたりを白く染めるほどの閃光が放たれ、レオンを狙っていた騎士

たちは1人残らず目が眩んでしまった。

「よし、逃げるぞ！」

そう言って走り出そうとするがなぜか足が動かない。

「レオン！早くしないと……。」

心配したクラウドがレオンの元に来ようとするがレオンはそれを止める。

「クラウド、行ってくれ。多分何かの術に掛かった。おかげで足が動かないんだ。」

「わかった。」

そついうとクラウドは“聖地”のある方向へ走っていく。

「こいつらもすぐに目が回復するだろうし、どうするかな。」

もうダメか……。そんなことを思っていると突然足が動くようになる。

だがその瞬間レオンは後頭部に強い衝撃を受け、意識が薄れていく。

「ようやく捕まえた……。」

最後に聞いたのは、そんな一言だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5410s/>

世界の守護者

2011年12月27日19時47分発行